

Title	乳癌
Author(s)	早田, 敏
Citation	癌と人. 5 P.22-P.24
Issue Date	1977-06-01
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/24178
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

乳 癌

早 田 敏*

—はじめに—

—近年、色々な医学情報、特に癌に対する情報がマスコミに取り上げられるようになり、一般の方の癌に対する知識も増えてきています。乳癌に関しても同様で、早期に自分で異常に気付いて、病院を訪ずれる人も増加している傾向にあります。しかし一方、どうしてこれ程になるまで放っておいたのかと思われるような進行した乳癌の方も後をたたないのが現状です。その原因の一つは、他の癌のように痛みとか出血とかいう直接の症状がないことです。又以前に医者診察をうけたことがあって、その時は心配ないと言われて、今度もそういうものだろうと考えて放っておくというのも一つの原因です。癌であったらどうしようと悩んで病院を訪ずれるのが遅れる場合もあります。乳癌のこわさを知り、それに対する正しい知識を身につけることが、乳癌から自分を守るうえで大切なことです。

—欧米と日本の比較—

—欧米では、女性癌の中で乳癌による死亡率が第一位を占めています。それらの国では国家的な事業として、乳癌対策に取り組んでいます。それに比較して我国では女性の癌の死亡率は、胃癌、子宮癌、肝臓癌、乳癌の順で、乳癌による死亡率は比較的低いものとされてきました。しかし乳癌患者は近年急激に増加しつつあり、生活の欧米化とともにますます増加し日本女性の重大な敵となって来ると考えられます。

—国際統計—

—「どうすれば乳癌が予防できるのか」、「どういふ人が乳癌になりやすいのか」という問題は欧米を中心として、論議されてきました。そ

れで最近、我国も参加して、世界8カ所で、同時に乳癌患者の生活環境、家庭環境、結婚、出産、授乳等の調査が行なわれ、その結果が発表されました。1965年から2年間、アメリカのボストン、イギリスのカージフ、ギリシャのアテネ、ブラジルのサンパウロ、東京等の専門病院で行なわれた調査の結果を米国で集計されたものです。それによりますと、全地域に共通して乳癌と関係が深かったのは初産年令すなわち、初めての子供を産んだ年令であるという結果になっています。ついで最初の授乳を3～6カ月間行なったかどうかすなわち自然な授乳期間をもったかどうかとも関係あるようです。結論的には、乳癌に一番なりにくくするためには、第一子を20才代に分娩して、その子に3～6カ月間の授乳をすること、そして適当に第2子、第3子を産み、それぞれの子に母乳を与えることだと言えます。しかし間違ってもらっては困りますが、ほんのわずかにそういう傾向がみられたというだけで、そうしたら乳癌にならないとか、そうしなかったから乳癌になるとかいうことでは決してありません。要するに女性として自然な環境が乳房にも一番よいというわかりきった結果であります。他の癌と同様に乳癌の場合も原因がわからないのと同時に、その予防法もみつかっていないのが現状です。

—年 令—

—乳癌に罹患された人の年令を調べてみますと表Iのようになります。

40才代が40%と一番多いのですが30才代も20%たらずの人がいます。やはり30才を越えたら自分は乳癌の好発年令に入ったのだと考え、集団検診をうけるなり、自己検診をするなりして乳房の異常に十分注意すべきだといえます。

* 医員（大阪大学微生物病研究所附属病院外科）

表1. 乳癌患者の年齢分布 (2090例)

20才代	36例 (1.7%)
30才代	382例 (18.3%)
40才代	839例 (40.1%)
50才代	538例 (25.7%)
60才代	219例 (10.5%)
70才以上	76例 (3.6%)

(藤森「早期乳癌」)

—初発症状—

一乳癌は自分で発見できる癌の内の一つです。そのためには乳癌とはどういうものかということを知っておかねばなりません。乳癌の人の初めて表われた症状を調べてみますと表2のようになります。一番多い症状は、乳房の中に異常なしこりが出来るということです。手指の腹でおさえてみて触れるようなしこりはすべて異常と考えて専門の病院を受診する必要があります。血液又は黒褐色の分泌液が、乳首から出た場合もやはり異常と考えて下さい。乳首がひきつれたり、乳房の形が変わったり、皮フが変色したりしても一度専門病院で診察してもらうことです。月経に関係なく片方の乳房が痛んでも危険信号です。

表2. 乳癌初発症状

腫 瘍	83.8%
腫瘍+疼痛	8.2%
腫瘍+乳房萎縮	0.4%
腫瘍+皮膚萎縮	0.6%
血性乳頭分泌	2.6%
疼 痛	1.0%
乳 頭 萎 縮	1.0%
乳 頭 びらん	1.0%
乳 房 肥 大	0.4%
そ の 他	1.0%

(藤森「早期乳癌」)

—診 断—

一乳房には癌の他にいろいろな病気があります。授乳期に起こりやすい乳腺炎、20才~35才くらいにできやすい乳腺線維腺腫という良性のしこり、及び生理が終わる頃にできやすい乳腺症という、乳腺の増殖、萎縮を主とした変化等です。

一般の人には見分けることは不可能ですが専門の病院では、これらを要領よく鑑別して、ガンの診断をつけているわけです。それではどういふ検査が行なわれるのでしょうか。まず第一には患者さんの話を聞くことから初まります。そこで病気の輪廓をつかみます。ついで視、触診です。乳房に外見上の変化はないかを観察しながら、乳房を触わって異常の有無を調べます。何かひっかかることがあれば、補助診断としていろんな検査を行ないます。乳房のレントゲン撮影が最初に行なわれる方法で、最近非常に進歩して、ごく小さな癌でも、診断がつけられるようになってきています。超音波を使う方法、皮膚の温度の差から診断するサーモグラフィという方法も役に立つことがあります。直接針を刺して、しこりから細胞を取って調べる穿刺吸引細胞診という方法も乳癌の診断には有用です。最後には手術的に悪い部分だけを取って組織を調べて、癌と診断することもあります。以上のような方法で100%乳癌は診断されるようになっていきます。しかし最もこわいのは、乳癌を他の乳房の病気とまちがえて放置することで、その意味でもやはり大きな経験のある病院の外科で診察をうけることが必要です。

—治 療—

一治療はやはり第一に手術ということになります。美容的にはよくないですが、日常生活は何ら支障なくおくれるようになります。美容上もいろいろな代用品が工夫され、洋服の上からは、全くわからなくなります。早期の癌であれば適当な病院で手術をうければほぼ100%近く治癒することが統計的に知られています。

—早期発見—

一乳癌予防の方法がない現在、乳癌に打ち勝つためには、早期発見、早期治療しかないと言えます。ではどうしたら乳癌が早く見つけられるのでしょうか。第一には、自分で自分を診察することです。30才をこえた女性は、毎月一回自己検診の習慣をつけて下さい。月経後一週頃、月経のない人は日を定めて、鏡の前で自分の乳房を視て下さい。正常の時の自分の乳房をよく覚

えておくことが異常を知る第一歩です。両腕を上げ下げして、乳房の形の変化、ひきつれが出来ないかどうか観察しましょう。つぎに仰向けに寝て、手指の腹で乳房をていねいにおさえてみて下さい。しこり、左右の差、乳首からの分泌物、異常な痛み等、何かおかしいと思えばすぐ専門の病院で診察をうけて下さい。これが第一の方法です。第二に、最近ではあちこちで乳癌の集団検診が行なわれています。積極的に参

加する努力をしましょう。又、異常がなくても一度専門の病院で診察をうけ、乳房のさわり方などおしえてもらうのも一つの方法です。

—おわりに—

—乳癌は自分で早期に発見でき、そうすれば完全に治癒する癌です。毎月一度自分の乳房を診察することにより、乳癌に打ち勝つことが出来るのです。